G.ドゥルーズにおける変身のための他者についての一考察

―批評「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」のフライデーをてがかりに―

瑞慶覧　洸　太

はじめに

人間が成長していく過程で、教師という他者は「教える」という営みを通じて学習者を人間たらしめんとしてきたが、そうした教育は学習者を従属した主体へと形成していくことや、その他の変容を捉え損ねているという批判がこれまでになされてきた。こうした権力性などへの批判から、教育学は軸足を学習者の「学び」へ移したように思われる[1)]。だが、そのことは学習という側面の肥大化へと結びつく。今井康雄によれば学習を強調する側面の肥大化によって、「教える試みは、自らを表現し解釈する言語や概念を失い、硬直した振る舞いとして表れること」（今井 2014: 7）になってしまい、日々の教育の現実で生起するものを取りこぼしてしまうと指摘する。この指摘をふまえたならば、「教える」という営みはどのような変容に開かれ、そこではどのような振る舞いをする他者が関わるのだろうか。

こうした問題意識と関わって本稿では、無人島をテーマとした小説を検討したフランスの哲学者ジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze 1925-1995）の批評「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」をてがかりに、人間の変身における他者の役割を検討する。もともと教育学においてD.デフォーの『ロビンソン・クルーソー』（1790）をはじめとする無人島を主題とした小説を手掛かりに人間の成長を論じたものはいくつかある[2)]。それらは無人島へと流れついた経験を教訓として扱うことを通じて成長していく様子を描くものとなっており、すぐれて近代教育学的である。無人島という日常の生活圏域とは異なる環境は、文明や社会に安住している人間にとっては試練を与えるものとして経験されていく。その試練を経つつ、より成熟した人間へと成長していくという特徴が無人島の文学的想像を手掛かりにした教育学的示唆であろう。

だが後に詳述するように本稿が注目するドゥルーズの議論、そしてその下敷きとなっているミシェル・トゥルニエ（Michel Tournier 1924-2016）の小説はデフォーの描いたロビンソンからは逸脱する部分を持ち、なにより他者を巡った哲学的な洞察が展開されている。その意味で無人島という特殊な状況ではあるものの、他者がいること／いないことによる人間の変容についての議論を確認することになる。このトゥルニエ論の言葉遣いをするならば、人間が変身していくプロセスにいかに他者が関わっているのか。やや先取りをして見通しを示せば、他者の不在が文字通りに論じられているが、しかしこの小説ではその変身には誰かが関わることを欠かすことはできないことが確認される。本稿はトゥルニエの作品が特異なタイプの無人島小説であることを浮かび上がらせつつ、ドゥルーズの議論において常に他者の存在が鍵となっていることの基本的な視座を獲得していくこととしたい[3)]。もちろん、他者論やドゥルーズをめぐる研究においてもこのトゥルニエ論は少なからず検討されることはあったが、あくまでも変身の経験に着目するものがほとんどで、他者の不在こそあれど、他者が介在することへの注目は多くない[4)]。本稿と先行研究との差分はこの点にある。

そこで本稿は以下の手順を採ることにする。まずは、トゥルニエの小説『フライデーあるいは太平洋の冥界（Vendredi ou les limbes du Pacifique）』（以下、『フライデー』と略記）についての概要とその特異性を確認する（１節）。そのうえで、ドゥルーズの議論を『フライデー』とも対応させながら読解することを通して他者についての基本的な議論を確認し（２節・３節）、人間ロビンソンの変身に何らかの他者が関わってくることを明らかにする（４節）。そして最後にそこから引き出される教育学的な示唆を改めてみていくこととする（５節）。

1．ロビンソン小説の変形としてのトゥルニエ小説とドゥルーズ

ドゥルーズの他者論と目されるトゥルニエ論を検討していくまえに、トゥルニエの小説について従来のロビンソン小説との違いを示しつつ、それ自体が他者論を展開していることをあらかじめ確認しておこう。

トゥルニエの小説『フライデー』は1967年に発表された小説でデフォーの『ロビンソン・クルーソー』を翻案したものである。そのタイトルにもあるように、登場人物（ロビンソンやフライデー）や無人島からの脱出を巡る点など基本的な設定を共有している無人島譚であり、基本的にビルドゥングスロマン（教養小説）として読むこともできよう。だが、デフォーの作品が啓蒙主義文学に近しい成長がモチーフである一方で、この作品は哲学的洞察を強く巡らせた変身をそのモチーフとしているという点に違いがある。もともと哲学者を志していたトゥルニエは性や同一化などのテーマや人類学的なエッセンスを取り入れてこの作品を練り上げていると特徴づけることができる。

そして何より、トゥルニエの『フライデー』が物語の展開としてデフォーの作品と異なるのは、文明社会の維持と開拓をめぐる描写、そして結末であろう。デフォーの作品においては、無人島に漂着したロビンソンは難破船の残骸から使える道具を引き上げて、島で文明社会を維持しようとする。住処をつくり、農耕や家畜を育て、法の制定などを通して生活を行っている。そして、ある日、別の島より訪れた異民族の生贄の儀式から救ったフライデーと出会う。別の島の異民族であったフライデーにロビンソンは言葉や文明社会的な生活を教えて主従関係をもつ。「まず最初に彼をフライデーと呼ぶことにしたのを教えた。彼を助けてやったのが金曜日だったからで、その日の記念にこう名づけたのである。同様にマスターと私を呼ぶようにさせ、それが私の名前であることを教えた。」（デフォー 1995: 284）こうして、文明社会（ロビンソン）による島の自然への開拓や未開社会（フライデー）に対する支配が折り込まれる。この関係は島を脱出する最後まで続き、彼らは島から出ていく。西洋的な聖書の道徳性など、一方の価値から他方の未開の価値へと働きかけが行われるように描かれ、未熟な者が成熟した者へ同化していく様子が垣間見える。ロビンソンは自らを律し、成熟していくと同時に教える者として振舞う。ここに啓蒙的文学としての位置づけと共振し、近代教育学が持つモチーフを見て取ることができる[5)]。

では、トゥルニエの作品はそれとどのように異なるのか。端的に言えば、上述のような関係性が上手く機能せず転倒する。デフォーの作品と同様に島へと漂着したロビンソンは島からの脱出や文明社会の維持をめざそうとするが、それは計画通りには進まない。むしろロビンソンは島（自然）と徐々に溶け合っていく。そうした状況が転換の始まりなのだが、そこに現れるのがフライデーなのであり、彼の振る舞いはロビンソンの思惑を逸脱する。確かにロビンソンとフライデーは主従関係を結ぶことで再び文明社会の維持が開始されるのだが、その支配からはみ出す行為をフライデーは行う。そして彼は、ロビンソンの居ない間に主人の煙草を隠れて吸う。この時の煙草の火が決定的な転回点となる。フライデーが投げた火が貯蔵庫の火薬に引火し、住居もろとも吹き飛ばしてしまう。ロビンソンが作り上げた島の文明社会は崩壊し、この破局は秩序の変化をもたらす。すなわち、この島での生活を主導する役割をフライデーが担うのである。「何年もの間、彼はフライデーの主人であると同時に父親だった。それがこの数日間にフライデーの兄弟になってしまったが―兄であるという自信はなかった。」（VLP: 220=156）ここではロビンソンは主人ではなくなった。そしてフライデーとともに行動し、彼の動きを模倣しながら変身していく。ロビンソンのようになるフライデーという構図は組み直され、フライデーのようになろうとするロビンソンが生まれる。ロビンソンは学ぶ者であり、変身する者である。このように異なった構図を描いているトゥルニエの作品は結末においてもデフォーのそれとは大きく異なる。変身しフライデーと双子のようになったロビンソン達のもとに船が訪れる。デフォーの作品であればこの船で島を脱出するロビンソンだが、トゥルニエのそれでは島を出ることはない。その島に訪れた他者に距離を感じ、むしろ当初は距離を感じていたフライデーに親近感をもっている。だが、そうしたロビンソンとは逆に、フライデーはその異なった文明社会の他者に魅せられて、島を出てしまうのである。こうして安定を得たはずのロビンソンは再び無人という状況に陥る。そして再び崩壊へと向かおうとす

るなか、自らの埋葬地を定めようとしたころに、別の来訪者が訪れる。フライデーが乗り込んでいった船から虐待を恐れて逃れてきた少年である。その子にロビンソンはサーズデーと名付けて、物語は閉じられることになる。

以上のように、トゥルニエの作品はデフォーの作品同様に無人島をモチーフに描きつつも、異なった描写で他者を始めとするテーマが描かれている。そしてこの作品に対する批評論文として寄せられたのがドゥルーズの「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」である。リセ時代からの友人であったドゥルーズは、67年にはこのトゥルニエ論を発表し、それが『フライデー』の後論として収められるとともに、ドゥルーズの『意味の論理学』にも収録されている。他者の喪失と別の他者との関わりなどが描かれているこの小説にドゥルーズもまた惹かれ、その描写と共振しながら他者というものについて考察を行っているのである。では、どのような議論なのか。ドゥルーズの他者論を見ていこう。

２．無人島経験と他者の効果／構造について

既に述べたように、無人島をテーマとする小説は数多くあるが、デフォーの作品では自然や他者との関係は一つの支配の関係として描かれてきた。ゆえに、島に流れ着いたロビンソンは無人島において、島を支配しようとすることで自らと文明を保持しようとしていた。それとは異なる仕方で描くトゥルニエの作品をドゥルーズは「冒険の驚くべきコミック小説であり、転身（avatars）のコスミックな小説である」と述べ、「島の他者なき人間たるロビンソンというテーゼそのものを展開する小説である」という（LS: 354=下231）。つまり、ロビンソンの身に降りかかった他者の不在に対して「われわれの経済世界の原型に引き戻す」のではなく、そのまま留まることを―それはロビンソンの転身をほのめかしながら―描くものだと指摘する。そのように指摘をしたうえで考察されるのが、他者の効果である。そこで着目するのは、他者がいなくなるなかで人間（ロビンソン）に襲い掛かる他者の不在という効果である。

例えば、物語序盤でロビンソンが「脱出号」と名付けた船で島を出ようとするが、失敗する。その果てに彼は精神をすり減らし始める。「脱出号」での失敗後の日誌には「孤独は、わたしがヴァージニア号遭難以来ずっとそこに沈んでいたかもしれない一定した状況ではない。それはゆっくりとだが、絶えずしかも純粋に破壊的な方向に沿ってわたしに影響を及ぼす腐蝕力のある環境である。」（VLP: 61=43）と書きつけている。それは、はじめのころまでは他者との関係が想像上であっても維持されていたが、時間が経つにつれて孤独という環境はそうした他者の存在を確実に減じていき、ロビンソンは「非人間化の過程（le processus de *déshumanisation*）」（VLP: 61=43）を進んでいくというのだ。このような他者の不在＝孤独による経験を受けてロビンソン自身は続けて次のように他者のことを日誌に書き記す。

> どんな人間も自分の内心に―頭の上にもだが―習慣、応酬、反省、機構、固定観念、夢、かかわり合いなどの脆くて複雑な足場を持っていて、それは絶えず自分の同類と接触することによって形作られ、変形し続けるということを、今のわたしは知っている。精気を奪われたこの脆い開花は、萎えて、風化する。他者は、私の世界の主要な断片である……毎日、わたしは、自分の個人的な構築物に新しい裂け目を記入しながら他者に負っているものを見積もっている。（VLP: 61-62=44）

ロビンソン自身、他者という「自分の同類」と触れ合う中で、自らの習慣などの足場を持っている・形作っているということを理解する。この「複雑な足場」を支えるものこそが他者なのである。ドゥルーズによれば「他者の最初の効果は、私が知覚する各対象や私が思考する各観念の周囲に、余白の世界、継ぎ手、背景を組織化すること」（LS: 354=下231）だという。一体どういうことか。ここでドゥルーズは対象の「私にとっての奥行き（*profondeur*）」が他者にとっての「横幅（*largeur*）」として見られるという形で説明しているが（LS: 355=下232）、より理解できるように筆者なりの具体例を挙げて考えてみたい。例えば、大きな建造物があり、その入り口に向かって立っている場面をイメージしてみよう。そこでの視点では目の前の入口という一点と、その周囲の視野が届く範囲までしか見えない。その範囲よりも先はもちろん、建造物の裏側の範囲は視界に入っていない。だが、私たちはそれらの視界に入っていない範囲が存在しないとは考えないだろ

う。なぜなら、立っていた地点とは別の場所、そこに他者が立ってくれるならば、自らが立った場所からその新たに視野に入りうる範囲が存在していることは想像できる。すなわち、他者がいることによって、自らの知覚範囲の周辺（近い外側）に潜在的ではあるが「つづき」を想像することが可能になる。その意味で先にロビンソンが自覚したように、私たちの知覚などの足場の構築は他者に負っているのである。ドゥルーズはこのことを次のようにいう。

> 私が見ていない対象の部分を、同時に私は他者にとって可視的なものとして措定している。そうして、私が周り込んでこの隠れた部分に至るなら、私は対象の後ろで他者と合流して、当の対象の全体を予見可能にするだろう。（LS: 355=下232）

上記のように他者なるものによって知覚の範囲を想像的に補うことができる。他者と触れ合っている私たちは、ある対象に向かっているとき、その目の前の対象の表面を捉えるが、そこに奥行や背後が存在しないとは考えない。向き合っている対象が単なる面としてあるのではなく、そこには遠近的な奥行や背後のようなものが配置されている。その意味で他者なるものの効果とは「隣接と類似の潤滑剤」（LS: ibid=同上）として知覚を支えることであり、他者を介して滑らかに認識をすることが可能になる。焦点には入っていないけれども、あり得ることが予想され、保障されている。あり得ることが分かっているからこそスムーズに視点を動かしていけるというわけだ。その逆に、他者が欠けたのならばその滑らかさは失われ、新たな視野は突如として現れる暴力的な仕方で突き付けられることになる。ドゥルーズは「「全か無の略式法則」。知られるものと知られざるもの、知覚されるものと知覚されざるものは、相互移行の含みもない戦闘状態の中で絶対的に敵対する」（LS: 355=下233）と、この事態を表現する。

このような他者の現前と不在による効果から、ドゥルーズは「なによりもまず、他者は知覚的な場の構造（structure du champ perceptif）であってそれがなければ、知覚的な場の総体はしかるべく機能しない」（LS: 356-357=下235）と述べる。他者がいるということは、「知覚的な場」を成立させる「構造」が組みあがっていることであり、それを「可能的なものの構造」（LS: 357=下235）とも呼んでいる。

では、可能的な構造としての他者とは何なのだろうか。トゥルニエ論においてドゥルーズは「怯えた顔」を例に説明する。「恐れた顔は、恐怖させる事物に類似していないが、恐怖させる事物を含意し、表現するものに表現されるものを置き入れるある種のねじれの中で、何か他なるものとして恐怖させる事物を包み込む。」（LS: Ibid=同上）ここでは「恐怖させる事物」を包み込んだものが構造としての他者ということになるが、まずは構造という語を一旦は置いて考えよう。そうすると、そこでの他者（の顔）とは見た者に恐怖させる可能的なものを含んだものということになる。顔それ自体は恐怖を感じさせる事物それ自体ではないものの、見る者に恐怖を知覚させる[6)]。そしてその包まれた「可能的なもの」を理解していくことで恐怖の現実が展開されていく。そして残っているのは「構造」という語である。この他者を存在者ではなく、構造として捉えることを強調するドゥルーズは「他者（autrui）は知覚の場のなかの諸構造の一つではない」（LS: 358=下237）と注意を促しながら次のように述べている。

> 他者は場の総体の条件となる構造であり、［……］知覚を可能にするのは、自我ではなく、構造としての他者である。［……］トゥルニエにならって、他者を可能世界の表現と定めることで、反対に私たちは他者のことを、すべての知覚的な場をカテゴリーに従って組織化するためのア・プリオリな原理に仕立て上げるし、また、知覚的な場の「カテゴリー化」として作動することを許容する構造に仕立て上げるのである。（LS: 358-359=下237-238）

以上のように、他者を構造として捉えるように強く要請する。では、ドゥルーズのいう構造とは何を指しているのであろうか。ほぼ同時期に別のところで彼は、構造主義の定義をしながら「構造的なものとは、空間のことである。ただし、非延長的な空間、前―延長的な空間、近傍の秩序として次々と構成される純粋空間である。」（ID: 243=66）と述べる。それは、空間における縁／中心やテクスト／コンテクストという秩序カテゴリーの構成を可能にし、それらは「すべての知覚的な場をカテゴリーに従って組織化する」原理になるのである。こうして他者は構

造として秩序空間を組織化する役割をもち、私たちに知覚を可能にさせてくれる。本節冒頭で言及したトゥルニエのロビンソンが書き綴った日誌を思い起こそう。人間は習慣などをはじめとする要素を足場として持っていると述べていた。ドゥルーズに基づいて言い換えれば、他者という構造によってこの内的な要素が構築され、それに支えられることで事物や世界といった対象を私たちは知覚しているということである。だからこそ、他者という構造が失われることによって、ロビンソンは事物を捉えることが難しくなっていくのだろう。「そしてわたしの孤独は単に事物の明白性を攻撃するだけではない。事物の存在の土台そのものまで浸食するのだ。」（VLP: 63=45）

こうした私たちの内的な足場に影響を与えている他者は、知覚の場を一定の方向へ働かせることで欲望にも影響を与える。ドゥルーズはその点についても、「私は、可能的な他者が見ないし思考しないし所有しないものなら、何ひとつとして欲望しない。ここに私の欲望の基礎がある。私の欲望を対象に向かわせるのは常に他者である。」（LS: 355=下233）と述べている。何をどう捉えるのかを方向付けながら知覚を支える他者は欲望の方向性までも規定していく。その意味でここで扱われている他者は、〈他者構造〉（structure Autrui）とも呼ばれるのだ。ゆえに、この〈他者構造〉の喪失から明らかになるのは、まさにどれほど私たちが日常的に他者に依存しているかという点である。

３．時間の喪失と島との融解

他者を喪失し、それに支えられていた知覚を導く構造の喪失で事態は終わらない。続けてドゥルーズが指摘するのは時間と自己の喪失の危機である。再びロビンソンの日誌を参照するならば、「その日その日を生きていくにつれて、私は自堕落になり、時間が指の間から漏れ、わたしは自分の時間を失い、自分自身をも失ってしまう。結局、この島における一切の問題は時間という言葉に翻訳できるだろうし、たとえ―もっとみじめなところから出発して―わたしがここで時間の外で生き始めていたとしても、それは偶然ではない。」（VLP: 70=49）と書き記している。他者を喪失し、知覚の構造を失いつつあるロビンソンは、時間の次元を失い始める。どういうことか。ドゥルーズによれば私という意識は、もとは「私の意識と区別されない、安心させる世界」（LS: 360=下240）として始まろうとする。だが、他者との出会いによって恐怖させる可能的なものが持ち込まれ、展開されると、安心させる世界と一体だった私の意識との間でズレが生じる。このことによって、私の意識は「私は…であった」の方へと傾きが生じるのである。ドゥルーズは「こうして、他者によって、私の意識は、必然的に「私はあった」に傾き、もはや対象と一致しない過去に傾くことになる。」（LS: ibid=同上）と述べて、時間との関りを指摘する。そして反対に、他者の不在によって「…であるもの」から「…であったもの」への移行が自己に生じなくなる。ゆえにドゥルーズは次のようにいう。

> したがって、他者は、時間的な区別である意識と対象の区別を保障するのである。他者の現前の第一の効果は、知覚の空間と知覚のカテゴリーの配分とに関わっていた。しかし、たぶん、より深い、他者の現前の第二の効果は、時間、時間の次元の配分、時間における先行と後続の配分に関わっている。他者が機能しないときに、どうして、なおも過去があるのだろうか。（LS: 361=下241）

他者が不在であることによって、私とのズレは生じない。すでにロビンソンが「島のものでわたしが見ないものは絶対的な未知なのだ。」（VLP: 63=44）と書き記したように、知覚が機能しなくなっていくにつれてズレを生じさせる機会も失われていく。こうして過去、「…であった」という意識が失われていくのである。

しかし、このことが含意するのは他にもある。他者の喪失によって明らかになった、自身に与えられていた知覚を可能にする構造、そして時間的配分はなによりも自己の意識を支えていた。すなわち、「根本的な効果は、私の意識とその対象の区別である。」（LS: 360=下239）自己の意識を支えていた諸々の足場を徐々に失いつつあるロビンソンは溶けだしてしまうのである。ドゥルーズは続けてこう述べる。

> 他者の不在においては、意識と対象は一つになってしまう。誤謬の可能性もなくなる。と

> いうのも、私が見ると信ずるものを詮議し反証したり検証したりするためのあらゆる現実的な法廷を構成する他者が現にいないからである。それだけではなく、他者は、構造からいなくなって、意識と対象を永遠の現在の中で癒着ないし一致させたままにしておくからでもある。(LS: 361=下241)

無人島においてロビンソンが経験した孤独＝他者の不在は、自己の意識の融解を生じさせ、そこで見たものはそのまま把握される。その捉えた対象が、それであるか否かは問題にならない。検証を行うための他者が不在であるがために、その見たままに対象の面がそのまま受容され、ズレも生じない。時間が喪失し、常に見ているものが自己と区別されないまま混濁している状態が訪れるのだ。

そしてこの事態をトゥルニエの物語に詳しく沿うならば、人間としての他者が不在となった無人島においては、もはや人間的な知覚や時間配分は成立していない様子として描かれる。そこでその空隙に入り込んでくるのが動物であり、昆虫であり、植物であり、そしてこの島スペランザである。動物（猪）のように泥へ浸かる行動や、昆虫と植物の擬交尾を目撃し自らの生殖を可能にする道を探り始めたりと、動植物が〈他者構造〉としてロビンソンに影響を与え始めるのである。そして森の中で見つけた女体に類似した木とロビンソンは交わる。すでに見たように他者は欲望を基礎づけていた。不在となったロビンソンの他者の位置に入ってきた動植物の効果は、ロビンソンに別の仕方での他者への性欲を方向づけた。そして、とうとうロビンソンはスペランザ島との間にマンドラゴラという子をもうけるに至る。それは他者の喪失によって非人間化の道を進み、猪らの世界が混入してくる経験を通して、他者とは異なる者との関係を取り持つことであり、ロビンソンが変容し始めた兆しでもある。フランス文学者の中江太一が「ロビンソンにとって、自然は観想の対象ではない。ロビンソンは、人間と他種の境界を突破して自然の中に分け入り、観察と行為を一挙に結びつけてしまうのである。その過程で、自然物の模倣が重要な役割を担っている。」（中江 2021: 96）と述べるように、自然（島たち）と新しい関係性へと入り始めるのだ。ゆえに、このロビンソンはデフォーのそれが自然を管理し、文明社会を維持しようとした描写とは大きく異なっているだろう。

この非人称的な性関係などを通して溶けていくロビンソンだが、ドゥルーズはこの過程を重視する。確かに無人島への漂流と他者の喪失という過程はロビンソンにとって苦しい状態であっただろう。「今まで彼には気づかれずに彼を人間性の手にゆだねていた彼の同胞である群衆が、とつぜん彼から離れたので、彼は自分にはもう一人で立っている力がないと感じたのだった。」（VLP: 44=31）だが、ドゥルーズはこの喪失を経て他者という構造が崩壊していくことを、啓示へと近づいていくこととして引き取り、「他者こそがトラブルだった」（LS: 362=下242）と述べる。〈他者構造〉が知覚や時間、欲望などのような自己の足場を支えていたことを繰り返し思い起こすならば、自己はそれらを通して世界と接していたということになる。敷衍するならば、〈他者構造〉は日常的な私たちを支える足場ではあるものの、そのことによって私たちを依存させ、拘束するような機能を果たしていたといえよう。ゆえに、はじめは他者の喪失を「世界の根本的な混乱として体験」（LS: ibid=同上）することになった。だが、他者の効果が薄れていくことで見えてくるものがあり、肯定的な変容がもたらされる。ドゥルーズはいう。

> 他者が喪失するや、日々だけが立ち直るのではない。他者が事物相互をもたれ合わせることもなくなることで、事物も立ち直るのである。対象へ向かわされることや他者が表現する可能世界へ向かわされることもなくなることで、欲望も立ち直るのである。(LS: 362=下242)

先に、欲望などもまた他者によって水路づけられ組織化されるという点に触れたが、他者の喪失は他者によってあらかじめ一定の方向に定められたものを解体するということをもたらす。他者を経由せずに直接世界と触れ合う。まさにそれは島との融解である。

こうしてトゥルニエのロビンソンは別の人間へと変身しつつある。そしてそれは崩壊しかけた世界との関係が別の仕方に構成されるはじまりだと、ひとまずは言えるかもしれない。ドゥルーズも述べるように、「世界のこの再構成こそが、ロビンソンの〈大いなる健康〉、〈大いなる健康〉の征服、「他者喪失」の第三の意味である。」（LS: 367=下249）この崩壊

を経て精神的な厳しさを通過したのちに、再構成へと入る。これを健康とドゥルーズは呼び、明らかに価値付けが行われている。文明社会的な人間ではないロビンソン、そのような彼の在り方にドゥルーズは別の生を見出したのである。

だが、この物語において世界との新たな関りはロビンソンだけでは完結しないことは先に少し触れた。そこに介入する者こそ、本稿が着目したいフライデーである。

4．変身に関わる他者、逸脱しつづける他者、そしてフライデー

他者の喪失を経験し、むしろそのおかげで世界との別の関係性を構築しようとしたロビンソン。その他者なき世界に足を踏み入れたのがフライデーであるが、この人物が関わることによってロビンソンの変容は完成される。ドゥルーズも述べているように「フライデーだけが、ロビンソンが開始した変身を案内し完遂させて、ロビンソンに変身の意味と目標を示すことができる。」（LS: Ibid=同上）本稿はこの言葉を文字通りに受け取ってみたい。

もちろん、トゥルニエのロビンソンもデフォーと同様に、新しく訪れたこの他者に対してかろうじて残っていた文明社会を再び駆動させて接する。だが、他者という構造を失ったロビンソンにはこの出会いは遅すぎた。そしてすでに見たようにこのフライデーは、ロビンソンの思惑から逸脱する。ある時は、ただ苦しい反復作業を命じられても楽しく行うフライデー。またある時は主人が見ていないところで、悪意なく文明社会の機能を破壊する。まさにフランス文学者の山上浩嗣が指摘するように、「フライデーは主人の命じる労働を完全な忠実さをもってこなすが、文明的な合理性の観点からすれば無駄ともとれる作業については、それ以上に熱心に取り組む」（山上 2004：212）異質な世界を生きる他者なのである。そして、冒頭で見たようにフライデーは火薬庫に火をつけてしまい、ロビンソンの残された文明社会を吹き飛ばす。

この大爆発を境に、ロビンソンと共にいるフライデーは本格的に〈他者構造〉ではない別の者として機能する。ドゥルーズはいう。

> 他者は、正規に作動するなら、可能世界を表現する。ただし、この可能世界はわれわれの世界の中に実在するのであり、そして、この可能世界が展開されたり実行されたりするや必ず我々の世界の形質を変えるのは、少なくともリアル一般の秩序と時間の継続を構成する法則に従っているからである。フライデーは全くほかの仕方で作動する。フライデーが指し示すものは、真と想定される他の世界、唯一真の還元不可能な分身であり、また、この他の世界の上の、フライデーでもなければフライデーでもありえない他者の分身である。（LS: 368=下250-251）

〈他者構造〉は既にあるような、現状のありうる「法則」に従属する。だがフライデーはこれまでに喪失してきた他者のように「われわれの世界の中に実在する」可能世界を示す存在ではない。むしろ、それらとは切れた―だが、別の仕方で機能するような―他の世界を示すのである。このことは中江も指摘するように、「フライデーは大気のような軽やかさを体現し、文明社会とは全く異質な無人島の自然の中で調和的な生活を送るための模範としてみなされていくことになる。」（中江 2021：98）こうして、フライデーは自然と共に生きるものとして、ロビンソンに対して別の仕方ではあるが、影響を与える。「他者の全き他者（tout-autre qu’autrui）」（LS: ibid=同上）として、フライデーは既存の秩序のもとに置かれた未開拓で未熟な存在としての姿ではなく、自由な人間としての別の姿＝分身（Double）をロビンソンに指し示すのである。

「他者なき世界を創設すること、世界を立て直すこと（フライデーが行ったように、あるいはむしろ、フライデーが行ったとロビンソンが知覚したように）、それは回り道を避けることである。」（LS: 369=下251-252）このようにドゥルーズが見て取るフライデーは、他者を経由せずに事に当たり、ロビンソンはその姿に別の影を知覚する。島や自然と別の関係性を生きる姿をフライデーが示しているとロビンソンは受け取り、別の世界へと導くものとして解していく。「彼の意に反して彼をそのさまざまな地上的根源から解放したフライデーは、彼を〈もうひとつのもの〉のほうに連れて行こうとしていた。彼にはうとましいこの地上的支配の代わりに、彼にはふさわしく、ロビンソンが発見したくてうずうず

している一つの秩序を打ち立てようとしていた。」（VLP: 217=154）ここでのフライデーはかつてのロビンソンのように秩序に従った支配や同化へと向かわせるものではない。むしろ、ロビンソンに命令を下したりするものでもなく、島の流れに乗りながら自分がその時にやろうと思ったことを行ってロビンソンを巻き込むのである。

ドゥルーズの分析は、こうした他者なき世界を生きることを〈大いなる健康〉を生きることと呼び、終盤で短く「倒錯」の議論へと重ねる。

> 倒錯者の世界は、他者なき世界であり、それゆえに、可能なき世界である。他者とは、可能化するものである。倒錯的世界は、必然のカテゴリーが可能のカテゴリーに完全に取って代わった世界である。（LS: 372=下257）

他者が不在の倒錯的世界は、可能な他者によって秩序付けられるような「可能のカテゴリー」ではない。ドゥルーズ研究者の小倉拓也が「可能性なき必然性を肯定する」（小倉 2018：172）と指摘しているように、可能のカテゴリーにおいては他者が現状のその最も支配的な秩序へと、すなわち可能な範囲へ水路図けられるのに対して、「必然のカテゴリー」とは、別様の全く他の世界をそのまま可能性に逆らって肯定する。ロビンソンが予感した、島の別の姿と重なって見えたフライデーの別の姿のように、異なった世界があり得ることを見せる。「ロビンソンはこう心に何度も何度もたずねてみる。初めて彼は、この腹立たしく、卑怯で、愚鈍な混血のインディオの下に、ひょっとしたらあるかもしれない〈もう一人のフライデー〉の存在をはっきりと垣間見る―ちょうど、昔、洞窟や渓谷を発見するずっと以前に、管理されている島の下に〈もう一つの島〉が隠されているのではないかと疑ったように。」（VLP: 209=147-148）このことから、フライデーもまた倒錯的な他者なき世界、〈倒錯構造〉（structure perverse）の表現としての振る舞いを示しているといえようか。ここでも敷衍するならば、〈倒錯構造〉は他者に引きずられずに自由に振舞うフライデーが示したような、世界との直接的な関係とでもいえよう。このドゥルーズのトゥルニエ論の表題にある他者なき世界とは、この示された〈倒錯構造〉に由来しているのだ。

とはいえ、以上のことから〈他者構造〉だけでなく、〈倒錯構造〉においても全く別ものであるが他者が重要となる。この物語において無人島への遭難という出来事はアクシデントであるが、そこでの構造の変容＝ロビンソンの変身を完成させるのも「他者の全き他者」なのだということが描かれたのだ。だが、物語においてこの「他者の全き他者」であるフライデーはまたしても逸脱する。ようやく新たな姿を獲得したロビンソンを置いて、フライデーは島に立ち寄った船に魅せられて島を出て行ってしまう。突如現れた船の乗組員という文明社会の他者は、今度はフライデーを別の世界へ誘惑したのである。いずれにせよ変身を助けてくれたフライデーは、ロビンソンの予想を大きく裏切り変化していく他者なのである。

５．別の仕方で教える者としての倒錯的な他者

さて、ここまでトゥルニエの小説を手掛かりとしたドゥルーズの他者論について確認してきた。自然に対して優越している文明社会への批判的な眼差しが透けて見えるトゥルニエの『フライデー』であるが、ドゥルーズはそこに何を捉えようとしていたのか。本論の問題意識に沿って改めて整理すれば、私たちのような人間にとっては他者の存在が重要であると指摘することができよう。ロビンソンの無人島における経験はそうした〈他者構造〉を機能不全にするには十分すぎる出来事であった。知覚の不調や時間意識の欠落、自他区分の崩壊といった経験からも、私たちが日常的に他者に多くのものを負い、文字通り、他者によって人間になり、それを維持していることがいえるだろう。

ここで着目すべきは、〈他者構造〉を維持しようとしていたロビンソンはフライデーをその主従の関係のもとへと取り込もうとしていた点である。すでに指摘したが、そこには未人間的な者を人間へと成長させようとする近代教育学的モチーフを見て取ることができる。その意味で、〈他者構造〉においては他者との関係は支配や同化の権力関係を内在させ、従属した主体の形成に資することになってしまう。ドゥルーズが「実際、対象の構成（形態－背景など）に対する知覚法則、主観の時間的決定に対する知覚法則、世界の継続的展開に対する知覚法則

は、〈他者構造〉としての可能的なものに従属するものとしてわれわれには現れた。」（LS: 370=下253）と述べていたことは繰り返し確認しておく必要がある。確かに人間へと成長するためには〈他者構造〉が要請されるが、同時に上記の問題を温存したままとなり、その人間もまた〈他者構造〉を維持する他者となる。〈他者構造〉が維持されたままでは、そこでの他者が関わる教育は単なる再生産の手段でありつづける。ロビンソンは学習者として〈他者構造〉を自らに築いてきたからこそ、フライデーにも今度は教師として〈他者構造〉を導入しようとしていたと言えるだろう。

しかし、このことはトゥルニエ論の半分だけしか表現していない。他方で、トゥルニエ論を経た私たちには別の構造も見えている。それがもう半分、〈倒錯構造〉と呼ばれたものであり、フライデーなしでは完成しないロビンソンの変身である。つまるところ、ロビンソンは教師になることは失敗しており、最後まで学習者である。もちろんフライデーは〈他者構造〉の一部として、つまり臣下として始めは登場していた。けれども、ロビンソンが途中から知覚し始めたように、〈倒錯構造〉の一部としての姿を示すようになる。そして無人島経験による〈他者構造〉の崩壊とフライデーによる島の大爆発で、ロビンソンの構造が転換した。学ぶ者としてのロビンソンは、島に対して管理という接し方をしてきた自分とは違った関わり方をするフライデーを観察していくことで自らも変身していくことを感じていく。だが、その際の二人の関係は〈他者構造〉で見たような従属を呼び込むものとは異なる。これについてもすでに触れてきたようにフライデーはただ示しているのであり、ロビンソンのことを管理しようなどとは思わない。ただともに行い、戯れるだけである。そしてそのことがロビンソンの変身へと繋がるのである。フライデーは学習者ロビンソンに示し、教えるのだが、支配者の地位に就くこともない。その意味で〈倒錯構造〉を導いたフライデーは主従の逆転でもなく、教えることの消失でもない仕方で関係を取り持つのである。

以上のことから、人間における成長のみならず、生成変化（Devenir）においても他者が鍵を握っていることが示唆される。換言すれば、支配や従属の主体だけでなく、自由な別の主体へと至るためにも他者が必要なのである。この他者の重要性は、國分功一郎が「知覚の場を構成するために必要なのは、自分と類似している他者なのである。」（國分 2019：157）と述べて示した「類似的他者」の概念とも通じている。國分はハイデガーの想像力についての議論と対比させつつ、ドゥルーズがその想像力の発生を問うていることに注目し、まさに想像力の発生源に他者が構造として関わっていることを論じている。國分の議論は自閉症がそうした「類似的他者」との出会い難さという状況にあることを論じているが、このことは翻って、多くの人間が別の在り様へと身振りを変えることをも支えるであろう。教育に携わる者が「類似的他者」として〈他者構造〉を築くことも、また別に〈倒錯構造〉によって他者なき世界を築き、完成させることもあり得る。だが本稿が冒頭にも触れたように近代教育のモチーフにとどまることなく、にもかかわらず「教える」ことを放棄しない、そのような変身に関わる他者を探し求めるならば、多くの者がとどまる〈他者構造〉を経由しつつも〈倒錯構造〉にまで変身するための「他者の全き他者」が鍵を握っているのではないだろうか。ある既存の世界にありながら別の姿や世界を幻視させる。その意味では、フライデーは自身のその二重性≒分身をロビンソンに知覚させるような健康的な倒錯者であったと言いうるだろう。

そして、この変身のプロセスで最後に指摘しておきたいのが、その構造変容にあたって描かれた変化は脱人間化ではないという点である。しばしば教育学における人間形成論では、人間化に対して脱人間化[7]が対置されるが、このドゥルーズが描いた変身のプロセスでは別の人間化の在り様が描かれているように思われる。確かに、既存の人間の範疇を解体して超出していく様子は脱人間化のようなプロセスを経由している。だが、「ロビンソンが〈大いなる健康〉を発見して獲得するのは、［……］他者とともに組織されるのとはまたく他の仕方で組織される限りにおいてである。」（LS: 370=下254）とドゥルーズが述べている通り、別様に組織化されうる。このことから、単に脱するだけではなく、別の人間の在り様になる変身がロビンソンに生じたのである。人間であったが非人間にもなったロビンソン。無人島での偶然の出会いを描いた文学的想像はこうしてドゥルーズを介して私たちにも別の世界を見せてくれていたのである。

おわりに

本稿はドゥルーズの他者論を読解していくことで、二つの異なった位置づけを与えられた他者について、その重要性を確認してきた。それらは、人間へと成長するためだけでなく、人間の変身においても鍵となる。5節でも触れたように、ここで検討した変身はトゥルニエ論では触れられていないが後にドゥルーズが用いる生成変化とも重なっていくと考えることもできるだろう。これ以降のドゥルーズは他者を表立って掲げていくことはない。とはいえ、変身を生成変化と重ねて考えることができるのならば、その後の議論においても他者は裏側に張り付いた問題として継続していくとも考えられる。このことを更に検討していくためにも本稿が積み残した点があることも事実である。例えば、〈倒錯構造〉についてドゥルーズ自身はトゥルニエ論では示唆に留めている。そのより詳細な検討を踏まえながら、こうした〈倒錯構造〉としての他者がどのようにして変身へと導くのかを分析する必要があるだろう[8)]。

とはいえ、本稿におけるドゥルーズのトゥルニエ論は教育に関する議論にどのような含意を有しているのか。従来までの無人島譚をモチーフにした議論では、近代的な（あるいは敬虔な）人間への成長が重要だったのに対し、トゥルニエ＝ドゥルーズのそれはさらに変身することを射程に収めた点で異なっていた。前者においては本稿で見た〈他者構造〉が親和的で、受け入れやすいだろう。だが、後者と関わる〈倒錯構造〉は誰かが関わるということはありながらも、解体のプロセスを伴うことやドゥルーズ自身の議論が示唆に留まっているため、即座に教育の議論として引き取るのは困難を伴った両義的なものといえよう。だがそのことは、教えることが改めて問われている現在の教育学にとって、既存の中心的な秩序へと引き込む働きかけとは異なった、全き他の働きかけの重要性を示唆しているように思われる。権力関係を内蔵し、温存していこうとするのでもなく、かといって他者が関わり教えていくことを諦めるのでもなく、変化を誘う全き他者としての教師が鍵となることを意味している。ここで多くの人が〈他者構造〉のもとで日々を送っていることを思い起こすならば、考えるべきものは他者なき世界を示し得る誰か、〈倒錯構造〉も視野に収めた教育の営みなのかもしれない。このことから本稿が示せたのは変身のための他者と、既存の世界で生きながらその秩序にも抗っている二重の振る舞いを見せる誰かの影である。

註

1）例えば、教育哲学者のガート・ビースタは教育の理論と実践において「「学習」という概念の興隆」と「「教育」という概念の衰退」（Biesta 2006: 15=2021: 15）という状況を挙げている。

2）のちにも触れるが、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』はドイツ啓蒙主義文学に大きな影響を与えており、J.H.カンペの『新ロビンソン物語』（1779-1780）がある。あるいは、無人島という状況を翻案した漫画作品に楳図かずおの『漂流教室』（1998）が挙げられ、教育学的に直接・関節的に影響を与えている（cf. 山内（2009）、山名（2009））。

3）付言しておくと、ドゥルーズはトゥルニエ論に先立つ小論を初期のころに書いているが、十分には議論が展開されてはいない。また『差異と反復』においても僅かばかり触れているが、トゥルニエ論と大筋では重なるため、本稿ではトゥルニエ論の読解に絞ることで具体的な他者（フライデー）に注目していくこととしたい。

4）例えば、J.Reynolds（2008）はドゥルーズがヘーゲル的な主従の弁証法から距離を取っていることを示唆しつつ読解をしているが、トゥルニエ論の結論すなわち倒錯の問題提起性については意義を認めつつも、「他者なしでやっていける」戦略については肯定的には受け取っていない。また、H.Movahedi（2020）は現象学との比較を通じて他者の構造を検討して、ドゥルーズの倒錯への移行についての結論を「器官なき身体」への接続可能性を示唆している。両者ともロビンソンの身に起こる経験の変容に主眼が当てられた示唆的な議論だが、その変容に誰かが関わっていることはあまり重視されることはない。他方で、小泉義之（2014）はドゥルーズが「粗野で愚鈍な混血児」との出会いを重視しているとして、他者の関りが重要であることを示唆しているが、重点的に検討しているわけではない。また、教育学においては他者を論じる際にレヴィナスなどはあってもドゥルーズの議論は注目されていない。

5）教育へのロビンソン小説の影響は、例えばルソーの『エミール』にも見ることができる。エミールに本を与えないとしていたルソーが与えることを認めた本としてロビンソン小説を挙げて、物語から自律的生活のための

「教訓」を見て取ることを望んでいた。あるいは、このルソーの影響を受けて、より教育的な形へと変形させたものとして、先にも挙げたJ.H.カンペ（1746-1816）の『新ロビンソン物語』が数え入れられる。カンペ研究者の山内規嗣は、その内容が「親に甘やかされて育った惰弱な若者の設定を与えられたロビンソンは、島という閉ざされた空間で、いわばルソー的な状況下での再教育を強制されるのである。」（山内 2009：70）と端的に特徴を示している。

6）何等かを包含した存在として他者を理解し、展開していくというモチーフはすでにプルースト論においても確認できる。例えば、次のような箇所であろう。「愛される者は、ひとつのシーニュとして、《魂》として現れる。そのひとは、われわれにとっては未知の、ひとつの可能な世界を表現する。愛されるものは、解読すべきひとつの世界、つまり解釈すべきひとつの世界を含み、包み、虜にしている。[……] 愛するということは、愛される者の中に包まれたままになっているこの未知の世界を展開し、発展させようとすることである。」（PS: 14=9）

7）ここで念頭にあるのは、矢野智司の研究である。発達などの従来の教育が動物性の否定という仕方で人間化することに対して、矢野はバタイユを参照しながら「否定の否定」という原理で「有用性の事物の秩序から離脱して内奥性の次元を回復しようとする「脱」人間化のモーメント」（矢野 2000：38-39）を提案している。この内奥性の回復において到達されるのが「わたしの意識が溶けてしまう」（同上：35）という「内的体験」と呼ばれる次元である。具体的には「供犠」が例に挙げられているが、こうした溶け合ってしまう体験は本稿の三節でみたロビンソンと動植物との溶け合うような関係性にあたるだろう。とはいえ、その後に出会ったフライデーによって可能になった変身においては溶け合ってしまうのでもなく、共に行うような関係性であった。矢野の議論とはこの点で違いがあるように思われるが詳しい検討は別稿に期したい。

8）小倉拓也は倒錯の論理について、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』の読解を通じて示唆的な議論を行っており、筆者の問題関心にも重なる。とはいえ、トゥルニエ論の読解においては本稿のようにフライデーなどの〈誰かが関わる〉ということはあまり重視されていないように思われる。これらの議論を踏まえた上で、他者について重ねて考えていきたい。

文　献

ドゥルーズとトゥルニエのテキストからの引用は略記号を用いて「原書頁＝訳書頁」で記し、強調はとくに断りが無い限り原文による。なお、訳文については既訳に従いつつ、多少の筆者による変更を加えた箇所がある。

今井康雄「学習の経験とメディアの物質性―「示すこと」の教育理論に向けて―」『教育哲学研究』109号、2014年、1-7頁。

小倉拓也『カオスに抗する闘い　ドゥルーズ・精神分析・現象学』人文書院、2018年。

小泉義之『ドゥルーズと狂気』河出書房新社、2014年。

國分功一郎「類似的他者　ドゥルーズ的想像力と自閉症の問題」檜垣立哉・小泉義之・合田正人編『ドゥルーズの21世紀』河出書房、2019年。

Deleuze, Gilles, *Proust et les signes*, P.U.F, 1964.（=宇波彰訳『プルーストとシーニュ〔増補版〕』法政大学出版局、1977年。）＝PS

――――――, *Logique du Sens*, Minuit,1969.（=小泉義之訳『意味の論理学』（上下）河出書房、2007年。）＝LS

――――――, *L'Île déserte et autres textes :Textes et entretiens 1953-1974*, Minuit, 2002.（=前田英樹監修『無人島　1953－1968』河出書房、2003年。）＝ID

Tournier, Michel, *Vendredi ou les limbes du Pacifique*, Gallimard, « Folio », 1972.（=榊原晃三訳『フライデーあるいは太平洋の冥界／黄金探索者』河出書房新社、2009年。）=VLP

デフォー, ダニエル、（鈴木健三訳）『ロビンソン・クルーソー』集英社、1995年。

中江太一「植物化するロビンソン――トゥルニエ『フライデーあるいは太平洋の冥界』における他種の模倣」『たぐいvol.4』亜紀書房、2021年、91-103頁。

Biesta, Gert J.J, *Beyond Learning: Democratic Education for a Human Future*, Paradigm Publishers, 2006.（=田中智志・小玉重夫監訳『学習を超えて　人間的未来へのデモクラティックな教育』東京大学出版会、2021年。）

Movahedi, Hamed, "The Other in Deleuze and Husserl." in *Dialogue : Canadian Philosophical Review /Revue canadienne de philosophie*, 60(1), 2021, 93-120.

山内規嗣「J.H.カンペ児童文学作品の改訂にみる叙述原理の変化―『若きロビンソン』再読」『教育学論集(5)』2009年、67-84頁。

山上浩嗣「自己が他者と同一化するとき――ミシェル・トゥルニエ、『フライデーあるいは太平洋の冥界』を読む」『関西学院大学社会学部紀要(96)』2004年、203-221頁。
矢野智司『自己変容という物語　生成・贈与・教育』金子書房、2000年。
山名淳「自律性－漂流記物をとおして考える」田中智志・今井康雄編『キーワード　現代の教育学』東京大学出版会、2009年、123-137頁。
Reynolds, Jack, "Deleuze's Other-Structure: Beyond the Master-Slave Dialectic, but at What Cost?" in *Symposium* 12(1), 2008, 67-88.